

日本人自らが発信する意義

CEL 英語ソリューションズ 江口 裕之



「トラッドジャパン」スタジオ風景 (2010年)
左: 江口裕之 右: Stuart Varnam-Atkin

私は2009年4月から4年間にわたってNHK Eテレで放送された『トラッドジャパン』の講師を務めさせていただきました。トラッドジャパンは、日本文化を英語で説明するための教養型語学番組で、毎回、すしや歌舞伎など、日本文化に関する特定のテーマを扱っています。英国人のナレーターStuart Varnam-Atkin氏と講師の私で英語トークを交え、テーマに関するビデオクリップ、言葉の文化比較、対談などを盛り込んだ20分の番組で、4年間で98本ものテーマをカバーしました。

トラッドジャパンに関する膨大な量のテキスト執筆や台本作成の過程で、私は日本文化を英語で説明することに関して拠り所となるぶれない柱を立てていました。それは、どの文化も、その文化の中に生きる当事者にしか説明できないもの、あるいは当事者が説明しなければ意味がないものがある、という考えでした。そこで、番組では、視聴者の皆様や私を含め、日本人だからこそ発信できるものを大切にしようという方針をスタッフ一同共有して作業を進めていきました。

たとえば、味噌は、英語でfermented soybean paste (発酵した大豆の練り物)と訳されますが、このような情報ならば、味噌を食べたことがない人や味噌が嫌いな人を含め、世界中の誰でも発信できます。とこ

ろが、Miso is an indispensable seasoning in Japanese cooking. (味噌は日本料理に欠かせない調味料です) やMiso can enhance the original taste of each ingredient. (味噌は素材の持ち味を引き立ててくれます) など、味噌の重要性や美味しさに関する説明は、味噌とともに生活をしてきた当事者が実感を込めて説明して初めて成り立つものです。このことは、食べ物だけでなく、日本人の生活、ひいては日本人のDNAに密着している日本文化のあらゆる側面についても同じであり、日本人が日本文化について自ら発信する意義はそこにあると思います。

「不思議な日本人」

現在、日本文化に関する英語で書かれた著書や記事は無数にありますが、注意が必要なのは、日本文化を外から見つめる外国人の観点で書かれたものが圧倒的に多いということです。もちろん、日本人自ら英語で著した、『武士道』(The Soul of Japan: 新渡戸稲造) や『茶の本』(The Book of Tea: 岡倉天心) などの優れた古典がありはしますが、その数は限られています。中には明治初期に来日した西洋の日本学研究者による100年以上前の記述をそのまま焼き直した風のものもあり、外国人が見た「不思議な日本人」という側面ばかりを強調したものも少なくありません。

例を挙げると、日本人の「本音」と「建前」の使い分けですが、これまで国際コミュニケーションの場では通用しない日本的発想として、批判の対象にされてきました。日本人は円満な人間関係を保とうと、物事を断る際に、Yes, Noをはっきりせず、「難しいですね」や「考えておきましょう」と言う傾向があります。もちろん、これらを直訳すると誤解を与えます。That's difficult.ではYesかNoなのか曖昧ですし、I'll think about it.では、承諾の意味に取られかねません。

そこで、日本人向けの英語教育の場面でも、これらの言葉や発想は控え、Yes, Noを

はっきりしましょうという指導がたびたび行われてきました。しかし、英語はもはや西洋文化圏だけにおける共通語ではありません。今日のグローバル社会においてより大切なのは、日本人が発想を西洋人に近付けることよりも、「なぜ」日本人がそのような言い回しをするのかを論理的に示し、その合理性や文化的価値を説くことではないでしょうか。

「神道と間接的コミュニケーション」

日本文化には、たとえば俳句や茶の湯など、既に世界で高く評価され、共感を得られている分野も数多くあります。他文化圏の人からすると「不思議」と思える日本の習慣や考え方も、このような文化的側面と同じ価値観に根ざしていることを指摘するのは重要です。表現手法に関して言うと、日本人は、直接的な表現よりも、間接的な言い回しの方がより文化的に洗練されたものとする傾向があります。これには様々な理由がありますが、神道の影響から考えてみましょう。

一神教の神と違い、神道の神々は姿が見えず、無数にいます。神道の神は日本の多様な自然現象が具現化したもの (manifestations of natural phenomena) と考えていいでしょう。神道の神は私たちに直接言葉で語りかけせず、五穀豊穡という恩恵、あるいは、自然災害という脅威をもって、間接的に、私たちの生活に対する指導的なメッセージを送ってきます。そのような環境で命をつないできた日本人にとって、各々の事象の背後にある含蓄的なメッセージをくみ取ることが大切になりました。

また、神道には言霊ことだまという概念があり、言葉自体に霊力が宿るという考えもあります。そのような背景から、言葉を慎重に選びつつ、物事を間接的・暗示的・多重的に伝えることがより洗練されたコミュニケーションの手法であると考えようになったのも不思議ではありません。和歌はその洗練の典型ですが、間接的な表現手法は言葉によるコミュニケーションに限りません。たとえば茶の湯においては、衣装、茶室、装飾品、茶器、動作、表情などあらゆる間接的な手法を用いて高度な意思疎通を行います。

「茶の湯とおもてなし」

茶の湯から派生した概念に、最近よく話題に上る「おもてなし」があります。英語では、「おもてなし」はhospitalityと訳されることが多いですが、やや意味が異なります。hospitalityはhostがguestの要求を最大限に実現してあげることです。ところが、茶の湯では、客は何一つ要求をしません。茶の湯のおもてなしでは、一切を主人に任せ、主人は客の気持ちを汲んで、あらゆる側面について最大の配慮をする一方、客はその主人の心を察して感謝の気持ちを間接的に伝えます。

つまり、おもてなしは、主人と客の相互信頼関係に基づく、洗練された間接的コミュニケーションの一形態と言えるでしょう。それを成立させるためには、客自身も自分を磨いておく必要があるのです。hostがguestの満足度を100パーセントに近付ける行為がhospitalityであるのに対し、おもてなしは主人と客が対等の立場からお互いのレベルを高め合い、100パーセントを超える歓待と感動を実現していくものと表現できるでしょう。

「文化と国民の絆」

このように考えると、西洋人の中で悪しき評判の本音・建前と、2020年東京オリンピックの招致で世界に感銘を与えた「おもてなし」の文化は表裏一体のもので、ともに日本人の感性が年月をかけて育んできたコミュニケーション手法であると言えます。このような日本文化の合理的側面の説明は、日本に生まれ育ったという実体験に基づく洞察力があるからこそ可能な部分が多々あります。さて、最後になりますが、その洞察力を磨いていくには何が必要なのでしょう。

それは、自国の文化を愛する気持ちだと思います。私はかねてから、文化と国民は親子のようなのだと述べてきました。親子はお互いに反発しあうこともありますが、他人には見えない信頼と愛情の絆で結ばれているものです。日本文化を見つめるときに、そのような絆を感じながら説明していけば、日本人だからこそ可能な日本文化の紹介ができるのではないのでしょうか。そこに、日本人が英語を学ぶ目的の一つがあるのだと思います。